

罪に問われることを覚悟の上で

遣唐使船が出立してから、空海の身を案じて日々を過ごす両親だったが、2年程たったある日、20年のはずの留学期間満了を待たずに空海が日本に帰って来たと言う知らせが届く。無事に帰って来てくれたことを安堵するも、国の代表でありながら、留学生（るがくしょう）（一種の留学生）として決められた年限を破って帰って来たので、今度はどんな罪に問われるのかと、親として案じる日々がまたしばらく続く。

もちろん、空海自身も何らかの罪に問われることは覚悟の上での早期帰国であったろう。遣唐使としての報告書でもある、『御請来目録』にその時の思いが綴られている。『御請来目録』によると、

わたくし空海は、遣唐使として唐に滞在しないといけない20年の期間を欠いて2年で帰って来てしまっており、その罪は死罪でも足りない位ですが、その反面、生きてこの密教という得難い教を日本に請来できたことについては、心中、歓喜にたえないものがあります。

とある。

その後、遣唐使の期間短縮の件で、何かお咎めがあるのではないかと案ずる両親の心配をよそに、今度は故郷の地に寺を建てたいから、なんとかしてくれとまた頼みに来た。

この時も両親は土地を用立てたりして、この寺は無事に建てられている。

それにしても、息子の空海が、10代後半で急に大学をドロップアウトしてから、十年ほど放浪していたかと思ったら、遣唐使になるからとお金の工面などを頼みに来て、その航海、留学の安全を案じていると、早々に唐から帰って来てしまう。

その違約の罪を案じさせられたかと思ったら、今度はまた寺を建てる協力をしてくれ、と次から次へとやって来る息子空海に両親は振り回され続けてい

1 親不孝者空海

る。

さすがにここまでくると、傍で見る方としてはそこに滑稽ささえ感じてしま
う。